研究ノート

日本の洋装化にみる和服地の使用について

Using Kimono Cloth to Make of Western Clothes in Japan

尾形 恵
Megumi Ogata

要旨

本論文は、日本人の洋装化がどのような経緯で普及したか、また日本人女性が着用した洋装に和服地が使われていたのかについて調査することを目的とする。日本の洋装化は江戸時代に始まっていたが市民に普及することはなく、明治時代に外交問題解決や社交場などとして造られた鹿鳴館で、上層階級の人々が欧米のバスルスタイルを取り入れた洋装化をきっかけとして、一部の市民への洋装化の浸透を促したといえる。このバスルスタイルのドレスは海外からの輸入に頼るだけではなく、洋裁技術を日本人が習得、着用する姿が浮世絵に残されていた。浮世絵に描かれる日本女性の着装しているドレスの柄と、きものの文様について関係性を調べた結果、鹿鳴館スタイルのドレスの柄には植物の柄が多く、梅や牡丹といった日本人に親しみ深い花や、蔦を図案化した唐草文様が描かれていた。唐草文様は中国より伝来し日本独自に発展した文様である。また、幾何学文様では菱文が多く見られ、発生は縄文時代と古いものである。いずれも日本のきものの柄の中にも取り入れられてきた文様である。このことからもバスルドレスを日本人が作るにあたり、和服地を利用してきたことが分かった。

●キーワード：浮世絵（Ukiyoe）／鹿鳴館（Rokumeikan）／和服地（Kimono Cloth）

Ⅰ．はじめに

日本における「洋装化」の始まりは、1866 年江戸幕府によって陸・海軍の制服が軍服に制定されたことがきっかけとされる。しかし「洋装」については、それ以前の 1858 年に日米修好通商条約が締結し、鎖国が終わる江戸時代末期には外国人の姿が多くみられ、長崎県の出島、神奈川県の横浜港などでは珍しいものではなかった。

明治時代（1868～1912 年）に入り、政府は欧米を手本とした政策の一環として生活様式から欧米風にしようと、和服を廃し、洋服を礼服にする動向となり、日本の洋装化が市民へも浸透した。当時の洋装姿の日本人が描かれた浮世絵・写真などが多く残されている。

筆者は以前に、同時代の欧米女性と日本女性が着用したドレススタイルの違いを、文献資料、美術品、写真等から調査し、さらに、この結果を基にパターンの違いについて考察し、文化学園大学内にて発表を行った。そこでは日本女性は欧米女性とは違い、和装に慣れ親しんだ生活習慣、また、日本女性に特徴的な華奢で小柄な体型の為、コルセットを締めても、バストを強調し上半身に凹凸が出せないことで、寸胴に見えるのではないかと考えられた。日本人女性の体型に欧米女性に作られたドレスを合わせるには、バスト周り、身丈、着丈、袖丈といった点に修正が行われる必要があったと考えられた。

文献調査の中では、洋裁技術を日本人が習得し着用する姿から、和服地が利用され作られていたことが伺える。また浮世絵を見ても柄や色彩は豊富であることがわかる。

そこで、本研究では日本人女性の洋装化と、浮世絵に残されている日本人女性の姿に着目し、洋装に和服地がどのように使われ浮世絵に描かれているのかを考察する。

Ⅱ．日本女性の洋装化

前述したように、日本における「洋装化」は軍服にがきっかけであるが、それ以前の江戸時代末期における出島、横浜港では「洋装」が珍しいものではなく、多くの日本人の目に触れるようになっていた。外国人が洋装している姿を描いた浮世絵も残されている。しかし、日本人の中に着用するということは浸透しなかった。

本学助手、服装造形学

日本の女性で初めて洋服を着用したのは、明治4年11月に岩倉視一行の米欧視察団に随行してアメリカに赴いた津田梅子、永井繁子、山川捨松など5名の女子留学生であったとみられている（図1）。日本からアメリカ号で出航する際は和服だった彼女たちは、渡米後に洋装を着用した。その服装はクリノリン衣装時代末期の服で、イギリスの若い女性に流行していたスタイルに近い服装であるが、その頃のアメリカはフランスやイギリスの服装の影響を強く受けていたため、女子留学生たちもそうした事情に基づく服装をまとったのであった。彼女たちが渡米後に洋装を着用したのに対し、明治初年に上野彦馬氏が撮影したとされる長崎の丸山の娼婦が日本国内で最初に洋装を着用したという記事が『日要新聞』三号（明治5年1月）にみられた。

図1　新政府の米国留学女学生

この後、新しい女子教育が始まり、1872（明治5）年に政府直轄の女学校として東京女学校が創立され、外国人女教師の下で上層家庭の子女が多数学んでいた。その生徒の一人、鳩山春子は東京女学校が廃校した後に女子師範学校に移った。学校は、春子を含めた三人の生徒にアメリカのフィラデルフィア女子師範学校への留学を命じた。だが、アメリカの教育に深入りするのは好ましくないという反論が閣僚のひとりから出たため、留学は取りやめになった。その際、春子たちが留学に備えて洋服二着、下着六組などを外国婦人の世話で用意していたことから、日本国内で洋服が作られるようになったことがわかる。

日本にミシンが輸入されたのは、1866年の「洋装化」のきっかけとされる以前の1860年、中浜万次郎が通訳としてアメリカに赴いた際に写真機と共に持ち帰ったのが最初であるといわれている。その後ドイツ製やイタリア製のミシンが輸入され、明治初年頃までよく使われていた。よって出島や横浜港の在日外国婦人はミシンを使って洋服を縫製することが出来たと考えられる。こうして洋服は日本へと伝達されたと言える。

1889（明治22）年1月30日に、ローブ・デコルテが宮中における婦人用西洋服四種の一つとして規定され、「婦人中礼服」として規定された。婦人西洋服四種とは、大礼服（Manteau de Coer）、中礼服（Robe decolletee）、通常礼服（Robe montante）、のことである。

Ⅲ．鹿鳴館について

鹿鳴館（図2）は、東京市麹町区旧山下門内の元薩摩藩装束屋敷跡（現在の大和生命敷地、帝国ホテル隣地）に建設され、明治16（1884）年11月28日に外務卿井上馨によって落成式が挙行された。イギリス人建築技師ジョサイア・コンダーが建設に当たる。総工費18万円という当時の金額としては、巨額の費用をかけて造られた。この鹿鳴館は、当時の上流社会の人々の華やかな社交場であるとしてのみ考えられがちであるが、文明開化に続く日本の一部上層階級の欧米模倣の生活を誇示するものであり、背景には、不平等条約の改正交渉という極めて深刻な問題があげられている。

図2　鹿鳴館門前の男女　日本画　作者不明

不平等条約とは、主に1858年の安政五カ国条約のことをいい、他国の領事裁判権を認めること、日本には関税自主権がないことなど、日本にとって不平等な内容であった。井上馨は1879（明治12）年外務卿に就任すると、既に近代国家として十分な条件を揃えている日本が不平等条約に甘んじているのは不当であることを訴え、条約改正に踏み切ろうと考え、いわゆる欧化主義の政策を実行に移した。その欧化主義の根幹には日本人の生活を西洋化し、外国人との交際を密にしようという考えがみられた。

その中で、諸外国から来日する人々も増加し、国賓クラスの人物が訪れることが多くなると、井上馨は条約改

正の交渉のためには仮設の宿泊施設では国際的儀礼にも欠けると考え、早急に鹿鳴館を建設することにしたのである。

鹿鳴館は煉瓦造二階建てのおよそ14,500平方メートル（約440坪余）の大建築物で、ヴェランダ形式のネオ・バロック様式を基調とした建物であった。また、外国からの賓客を宿泊・接待するためだけの施設としてではなく、国際親善の場であると同時に、鹿鳴館に招かれた外国人たちに日本が決して未開の野蛮な国ではなく、欧米諸国にも劣らないほどに文明開化された国であることを印象づけるという役割を担い、夜会や舞踏会、仮装会、慈善会が開催された。

鹿鳴館の夜会に関する服装規定には、男性は燕尾服、女性はローブ・デコルテ、または白襟紋服の着用が義務付けられていた。女性は洋装の場合、1870年ごろから欧米で流行し始めたバスルスタイルのドレスを着用することとなる。

ローブ・デコルテがはっきりと鹿鳴館の夜会における服装と規定されるようになったのは1889（明治22）年1月末日以降のことであった。

Ⅳ．バスルスタイルについて

バスルスタイルのバスルとは、女性のスカートの後ろ腰を膨らませるために用いられる枠状下着、または腰当のことである。後方にボリュームを持たせるために用いたバスルは、馬毛や鳥の羽毛をつめたクッション形式のもの、針金を組んだもの、布帛製のものなどがあり、これをペティコートの上から細ベルトでウエストにくくりつけた。またバストを強調する為、ウエストを細くし、コルセットで締め付けた。

1　西洋

このバスルスタイルは19世紀後半、欧米の上流貴族の間で流行した（図3）。

図3　外出着　1887年

コルセットの技術が進み、精巧な製品が出てきており、固く成形した鎧のようなものからニット製のものまで様々である。ウエストは53㎝から56㎝程度に設定されている。故意に腰をふくらませ、ウエストを細めるという技巧的なシルエットが特徴である。

2　日本

鹿鳴館での催しに出席する上流階級の間でこのバスルスタイルが普及し、鹿鳴館スタイル（図4）と呼ばれ、流行に敏感な、女子学生へも広まる。

鹿鳴館の夜会で、日本女性が用いたバスル衣装は、ほとんどが輸入に頼っていた。現存する多くのバスル衣装はイギリス製である。

図4　鹿鳴館貴婦人慈善会之図　1887（明治20）年

1865年頃、居留外国人の為の洋服店が横浜に開かれており、洋装を必要とした日本人もこれらの店を利用した。洋装の需要に合わせ外国人指導者や領事の妻たちにより更に洋服店が増加したが、海外から輸入されたパターンやドレスである為、日本人の体型に合わせて仕立て直して着用していたと考えられる。しかし、ドレス一式を全て揃えるには、約400円、現在の価値にして約300万円かかり、高価なものであった為、コルセットなどの下着類、アクセサリーは輸入に頼り、ドレスのみを日本人の洋裁技術習得者によって作られるようになる。和製のバスルドレスも現存しており、ボディスの内側のベルトについているネームにより「白木屋」製であることがわかった。これは内務省などに勤務した後、海運業に貢献した塚原周造夫人が着用していたものである。これは孫の賀原夏子氏が文化学園服飾博物館に寄贈したもので、現存する和製のものは非常に珍しい。直線を主に縫う着物とは違い、多くのカーブを縫い合わせるには大変難しい技術を要したのではないかと考えられる。その為、カーブを縫う技術を持つ足袋職人が重用された。中でも、足袋職人、沢野辰五郎は米国宣教師S・Rブラウ

ン家に雇われ洋裁技術を習得し、1868年頃、洋服店を開業している。他にも同じように技術を習得した足袋職人がおり、鹿鳴館が開館したことや、宮廷服も洋装化されたことにより、需要が増え、高収入を得ることが出来ていたとされている。貴女裁縫之図（図5）では洋裁中の女性が描かれ、特に華族の令嬢や夫人には洋裁や、舞踊が出来ることが身分の高さを象徴するものとなった。

日本で製作されたバスルドレスには、素材に西陣や足利の極上品の絹が使用されていた。その他レース、ボタン、ボンネットの類は和製ではなくすべて海外からの輸入品であった。そこで少しでも値段を抑えるため、素材を絹ではなく全て木綿にし、しかも下着をつけない婦人が見られたという。技術を持つ日本人が増えたことで、流行に敏感な若い女子学生の間にも流行する（図6）。縫う技術を持った人が、地方へ持って帰ったことにより、流行は東京だけでなく、地方にも広まったと考えられ、新潟の女子学生がバスルドレスを着用する姿が写真に残されている（図7）。

図5　貴女裁縫之図　1887（明治20）年

図6　学習院女生徒　1886（明治19）年

図7　新潟女子師範生徒

しかし、写真を見ると、欧米女性が着用する際のバスル独特のウエストのくびれやバストの強調がなく、後ろ腰だけが膨らんでいることが伺える。輸入に頼っていたコルセットやバスルなどが高価であり、限られた女性しか身につけることが出来ず、学生自身がスカートのみに工夫して着用しているのではないかと思われる。

欧化政策によって洋服を推奨されたが、多くの女性が家庭の中では和服姿で生活をしていた。洋服の方が実用的と言いながら、コルセットを締め、ドレスを着用し生活することは、和服に慣れた女性には大きな負担であったと考えられる。

V．浮世絵に描かれるドレスの柄ときものの文様

浮世絵に描かれる日本女性の着装している洋服の柄と、きものの文様について関係性を調べる。

1　浮世絵について

浮世絵は、日本が生み出したものである。多少の粉飾も考えられる、当時の生活実態を知る資料としては最高のものである。

浮世絵は、墨一色摺り、採色「丹絵」、彩色「紅絵」、「紅摺絵」、「錦絵」の順で発展した。1764～72年の明和期はじめに誕生した「錦絵」は使用される色数が豊富で色彩豊かである。浮世絵には、風景画、美人画、役者絵、相撲絵などがあり、その主題は多岐にわたる。鹿鳴館を舞台とした浮世絵も多く描かれ、洋装姿が残される。

2　きものの文様について

文様の始まりは縄文時代にすでに見られる。人々の暮らしに大きく関わることで発展し、江戸時代には出版文化が発展したことにより浮世絵が全国に普及し文様を特集した本が出版されるほどである。中でも日本のきものには様々な文様が描かれている。四季それぞれに見られる植物や動物、自然現象をモチーフとしたもの、また、中国より伝来した吉祥文様や身近なものをモチーフとした文様が数多く発展した。

3　調査方法

同時期に描かれた浮世絵の抽出を行い、さらに、その中から鹿鳴館スタイルである女性のみを抽出する。その女性が着装するバスルドレスのローブ、もしくはジャ

ケット部分の文様を以下の分類に分ける。文様は「きもの文様図鑑」を参考に描かれているモチーフを植物、動物、風景・天象、幾何学、吉祥、無地、その他、不明に分けることとする。また、その結果より、きものの文様とのさらなる比較を行うこととする。

4　結果・考察

まず、明治 20（1887）年から明治 22（1889）年にかけて制作された浮世絵 8 点を抽出する（表 1）。その中で鹿鳴館スタイルの日本人女性は計 47 名であった。その 47 名の鹿鳴館スタイル女性のバスルドレスのローブ、もしくはジャケットの柄を文様別に分けると以下の表 2 の通りである。

表 2 より、植物が最も多く、次いで植物の半数であるが幾何学が描かれていることがわかる。以上のことから

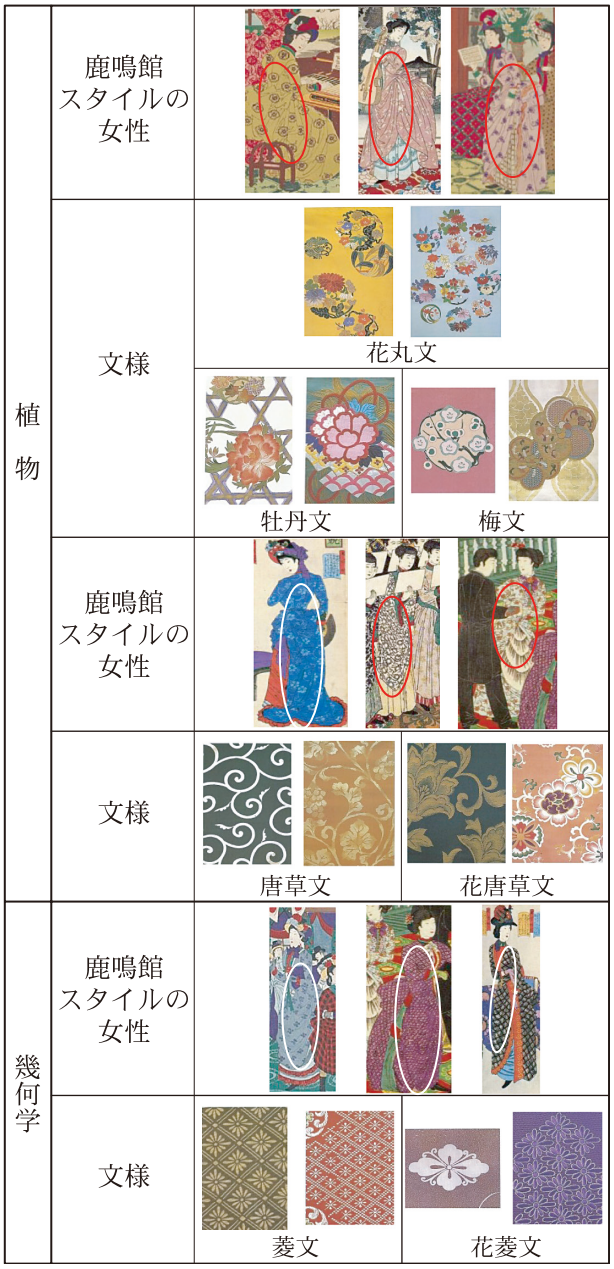
表１　抽出した浮世絵

No.1　鹿鳴館貴婦人慈善会之図　1887年
No.2　貴女裁縫之図　1887年
No.3　小学唱歌之略図　1887年
No.4　小学唱歌之略図　1887年
No.5　束髪美人競之図　1887年9月
No.6　梅園唱歌之図　1887年12月
No.7　貴顕舞踏之略図　1887から1892年頃
No.8　欧州管弦楽合奏之図　1889年5月

表２　様別集計表

	鹿鳴館スタイルの女性	植物	動物	風景・天象	幾何学	吉祥	無地	その他	不明
浮世絵No.1	5	2	0	0	1	0	1	0	1
浮世絵No.2	6	4	0	0	0	0	0	0	2
浮世絵No.3	11	1	1	1	3	0	4	0	1
浮世絵No.4	1	0	0	0	1	0	0	0	0
浮世絵No.5	4	1	0	0	1	0	2	0	0
浮世絵No.6	5	3	0	0	1	0	1	0	0
浮世絵No.7	8	1	0	1	2	0	4	0	0
浮世絵No.8	7	6	0	0	0	0	0	0	1
各　合　計	47	18	1	2	9	0	12	0	5

表３　バスルドレスと文様の比較



植物、幾何学に着目し、浮世絵に描かれているバスルドレスの柄と文様について比較を行った（表 3）。

表 3 より植物の中でも、多く描かれていたのは花、唐草である。

「花丸文」は各種の草花を円形に図案化した丸文の一種である。抽出した女性のバスルドレスを見ると、梅や牡丹といった花などが描かれていた。これは古来より日本人に親しまれる身近な植物であり、また富貴の象徴でもあったためと考えられる。

「唐草文」は蔓状の曲線をつないで作られる、または蔓草がからみ這う形を描いている。西アジアが起源とも

いわれ中国より伝来し、日本独自に発展したものである。

「花唐草文」もその一つである。「唐草文」はきもののみではなく、什器や陶磁器にも描かれ、生活の中にも溶け込み親しみある文様であったと考えられる。

「菱文」は右斜め、左斜めの平行線が交差したところにできる菱型を図案化した幾何学文である。その形は縄文時代の土器にも刻まれている。平行線を用いた文様を基本としているが、「花菱文」のように動植物の文様を図案化した形も多い。平安時代の装束にも展開されていることから日本人の生活の中で発展してきたと言える。

浮世絵の中に描かれたバスルドレスの日本人女性の多くは日本古来から使われる文様の着物地を用いたドレスを着用していたことが分かった。このことからも、鹿鳴館スタイルとよばれるバスルスタイルのドレスには日本の織物が使われてきたことが分かる。海外から輸入したバスルドレスとは異なり、日本の文様、素材を用いて作られた独特のスタイルが「鹿鳴館スタイル」と呼ばれるスタイルの発展に深くかかわったと考えられる。

Ⅵ. まとめ

日本の洋装化は江戸時代にはすでに始まっていたが、市民に普及することがなかった。明治時代に外交問題解決や社交場などとして造られた鹿鳴館で、上層階級の人々が欧米のバスルスタイルを取り入れた洋装化をきっかけとして、一部の市民への洋装化の浸透を促したといえる。特に女性は鹿鳴館スタイルという新しいバスルスタイルを生み出した。ドレスは海外からの輸入に頼るだけではなく、洋裁技術を日本人が習得し、和服地を利用してドレスを作り、着用する姿が浮世絵の調査から分かった。浮世絵は生活実態を知る資料であり、明治時代の作品には洋装姿の日本人の姿が多く残されている。そこに描かれている鹿鳴館スタイルの日本人女性のドレスには植物や幾何学文様などが多く描かれていた。植物には梅や牡丹といった日本人に親しみ深い花が図案化して描かれていた。唐草は中国より伝来し、日本で発展した文様である。生活の中にも多く取り入れられた。幾何学文様の中で多く見られた菱文の発生は縄文時代と古い。いずれも日本のきものの柄の中にも取り入れられてきた文様である。このことからもバスルドレスを日本人が作るにあたり、和服地を利用してきたことが分かった。

今後、浮世絵の資料数を増やし、着装している洋服の柄と、きものの文様について関係性を継続調査する。また鹿鳴館スタイルのドレスや、同時代の宮廷衣装について、パターンや、縫製技法を分析、複製し、実物調査へと繋げる。

図版出展

・遠藤武、石山彰　著
『写真にみる日本洋装史』文化出版局、1980 年
・大沼淳　発行
『ファッション史―西洋服装史概説―』
文化女子大学服装史学研究室編、文化女子大学教科書出版部、2001 年
・熊谷博人　編
『江戸文様図譜』凸版印刷、2007 年
・小西四郎　著
『錦絵幕末明治の歴史⑨鹿鳴館時代』講談社、1977 年
・藤根井和夫　編
『歴史への招待』凸版印刷、1980 年

参考文献

・青木英夫　著
『下着の文化史』雄山閣出版、2000 年
・井上智恵　著
『鹿鳴館時代に日本人が着用していたバッスル・スタイルについて―実物製作―』
文化学園大学卒業論文、2009 年
・遠藤武、石山彰　著
『写真にみる日本洋装史』文化出版局、1980 年
・大沼淳　発行
『ファッション史―西洋服装史概説―』
文化女子大学服装史学研究室編、文化女子大学教科書出版部、2001 年
・熊谷博人　編
『江戸文様図譜』凸版印刷、2007 年
・小西四郎　著
『錦絵幕末明治の歴史⑨鹿鳴館時代』講談社、1977 年
・長崎巌　監
『明治・大正・昭和に見るきもの文様図鑑』
平凡社、2005 年
・花園素子　著
『浮世絵に見る真正広告と隠れ広告―仙女香やたら顔出す本のはし―』
ファッションビジネス学会研究ノート、2012 年
・藤根井和夫　編
『歴史への招待』凸版印刷、1980 年